

# 活動成果報告書

令和7年度（第29回）「チヨダ地域保健推進賞」

<p>活動テーマ 生活支援体制整備事業における保健師活動 ～地域の活性化と多世代交流の場「あさがおサロン」～</p>	
<p>グループ名称・氏名(グループの場合は代表者名) 土浦市社会福祉協議会 福祉のまちづくり係 代表者：森川 真奈美</p>	
<p>勤務先：土浦市社会福祉協議会 所 属：福祉のまちづくり係 所在地：〒300-0036 茨城県土浦市大和町9-2 4階 T E L：029-821-5995 F A X：029-824-4118</p>	

## ◇活動方針

国は団塊の世代が75歳以上になる2025年に向けて医療・介護・予防・住まい・生活支援の一体的な提供の仕組みづくりが必要として、地域包括ケアシステムの推進を進めている。平成27年の介護保険制度改正により、本市では平成29年より生活支援体制整備事業を実施することとなり、本協議会が受託している。

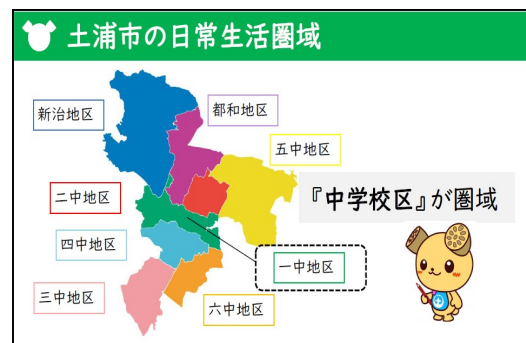
## ◇活動内容とその成果

### 【活動内容】

近年、本市においても核家族化や少子化に伴い、地域でのつながりが希薄になっており、従来家族内や地域で行われていた高齢者と子どもの交流の機会は減少している。子どもにとって多世代との交流が減少することにより、社会性を育む機会が失われている状況である。また高齢者においても、社会的な役割を担う機会が減少することにより、孤立化や生きがいの喪失が進行し、QOLの低下にもつながっている。

地域課題の解決に向けて本市では8つの中学校区に生活支援コーディネーターを1名配置し、ふれあいネットワークを形成している。私は令和4年4月に生活支援コーディネーターとして市中心部の一中地区担当として配属された。まずは保健師活動の一環として、地域を自転車等で巡回し、地区把握を進め、令和5年4月に本協議会にて作成した、地域福祉活動計画の地区別地域福祉計画の地域課題でもある『安心して子育てができる地域にしたい』、『地域活動をする人が減少している』という2つの課題について地域住民とのヒアリングを通じて改めて課題の認識をした。

これらの課題の解決に向けて保健師として、子どもへの支援を行っていく必要があると考え、令和



## 活動成果報告書

4年12月に地域住民4名に子どもへの支援について考えてくれないかと声をかけ、第二層協議体と

して話し合いを始めた。何度も話し合いを重ね、子どもや困窮世帯、ひとり親世帯に限定せず、子育て世帯の支援を行おうと意見をまとめ、令和5年2月に「一中地区子育て世帯を応援する会」を発足した。会の活動については月に1回をベースに話し合いの場所を設け、住民主体で話し合いが円滑に進められるように生活支援コーディネーターとしてファシリテーションを行った。



【第二層協議体とは：地域住民の支え合いの仕組みを構築することを目的とした「生活支援体制整備事業」において日常生活圏域（おおむね中学校区単位）で設置されている話し合いの場。】

### ①おさがり市の開催

NPO 法人よりおさがりの子ども服を譲り受けたことをきっかけに、子ども服のフリーマーケットを公民館で試験的に実施した。この取り組みは盛況であったため、令和6年4月より毎月第四土曜日に開催している子ども食堂の開催時に合わせて、定期開催することとなった。地元小学校の校長から声をかけていただき、小学校の廊下に「体操服回収ボックス」を設置することで、50枚以上の体操服が集まった。「おさがり市」については会のメンバーだけでなく地域住民や地元小学校の保護者などと協力しながら運営を行っている。



### ②あさがおサロン

昨今話題となっている子どもの居場所作りについてもメンバーと話し合いを重ねた。居場所が必要な期間は、長期休暇中ではないかと協議し、試験的に令和6年7月～8月の夏休みに公民館を使用し、小学生や未就学児の受け入れを行った。受け入れに当たっては、地域の高校生や大学生、専門学校生を学生ボランティアとして迎え、また民生委員など地域の支援者に協力を仰ぎ、夏休み期間において12回開催することができ、延べ257名の参加があった。



この活動の支援者の多くは高齢者であり、この活動を通じて、普段交流機会の少ない、小学生や学生ボランティアとコミュニケーションを図る場となった。会話が弾み、いきいきと活動している高齢者の姿も見受けられたことから、サロンによる交流が高齢者の孤立を防ぎ、精神的、社会的健康の増進につながったと考えられる。また小学生の保護者からは、「子育てに余裕ができた。」「夏休みの間は家の中で過ごすことが多いので、子どもが気分転換できたように見える。」「お友達と遊ぶことができ助かります。」といった反応があった。そのことから子どもたちの心の健康の増進にもつながったのではないかと考えており、結果的には、子どもやその保護者、そして高齢者の三者にとって、とても意義深い活動となっている。



## 活動成果報告書

また、参加者からとても好評であったため、令和7年3月から4月の春休み期間に4回、令和7年7月から8月にも同様に9回実施。回数を重ねていくごとに参加者が増えていった。

### 【活動成果】

あさがおサロン開催にあたっては、学生ボランティアの力が非常に大きいと感じている。開催日には8名から10名程度の学生ボランティアの参加があり、はじめは慣れない小学生とのかかわり方に困惑していた様子であったが、徐々に子どもの目線に合わせ、コミュニケーションを図れるようになり、学習の手助けや一緒に遊んだり学生ボランティアの成長も見て取れた。参加してくれた学生ボランティアから話を伺うと、「地域に貢献できる喜びを強く実感しました。」「高校生でも地域に貢献できるとわかり、うれしく思います。」「高齢者の方々に『高校生が来てくれると助かるよ。』『子どもたちが安心して過ごせている。』といった声をかけていただき、責任感と誇りを覚えました。」と学生ボランティアの地域貢献の重要性の理解が深まったこと、自己肯定感の向上につながることができたと考えられる。

また、冬休みのイベントとして、「あさがおサロン de クリスマス会」をメンバーで企画し、話し合いの場から学生ボランティアが加わり、企画・立案から関わってもらい、多世代の意見を取り入れ、多世代交流の場を目指した。当日は、一中地区公民館の部屋を借り、普段のあさがおサロンでは体験できないゲーム等を行い、参加者、それを見守る高齢者、学生ボランティアのあふれる笑顔を見ることができた。

この活動の発端は、地域の高齢者が主体となって始まり、そこから多世代につながる、そして生きがい・やりがいのある活動に繋がり、地域の活性化や多世代交流の場に寄与しており、特に高齢者における多世代交流については、子育て世代の母親や子ども、ボランティアの学生等との情緒的なコミュニケーションの一つである「身体的接触」を伴う交流も行われており、その中でも保育的ボランティアの要素も持ち合わせていることから、高齢者の生きがい対策として有益なプログラムになる可能性があること、また保護者からは交流を通じて、「他者への思いやり」、「コミュニケーションスキルの発達」にもつながり心的距離を埋めるきっかけづくりとなっている。



### ◇今後の計画

生活支援体制整備事業は、高齢者が可能な限り自分らしく、住み慣れた地域で安心して生活できる地域づくりを目指す事業であるため、今後は、中心メンバーである高齢者の意欲をさらに引き出し、会の活動が活発になるよう声掛けを行いながら、多世代交流につながる活動として、「子どもの集いの場」の開催頻度を増やし、新規企画を目標に第二層協議体メンバーや学生ボランティアとも連携を図り、住民がより健康的に一層活躍できる居場所づくりを目指し、また、市内全域8つの中学校区に配置している生活支援コーディネーターの資質向上を目的とした研修を企画し、市内全域が新しい地域づくりに繋がる体制を構築できる仕組みづくりを行っていきます。